

2013年4月25日(木)
株式会社ボーネルンド

～ 子どもの「体遊び」に関する母親の意識調査 ～

「体遊び」成長への重要性高く認識も、実態は「不十分」**成長段階・男女別で大きく異なる「体遊び」環境の課題が明らかに**

子どもの健全な成長に寄与することを目的に教育玩具の輸入・開発・販売とあそび環境開発を行う株式会社ボーネルンド（本社：東京都渋谷区、代表取締役社長：中西弘子）では、4月上旬に幼稚園・保育園（年中・年長）から小学6年生のお子様を長子に持つ全国の母親1,248人を対象に、「子どもの『体遊び』に関する母親の意識」についてインターネット調査を実施しました。

当社では、5月5日の「こどもの日」を、子どもの健全な成長について大人全員が考える日とすることを提案しています。今回はその一環として、子どもの成長に欠かせない「体を動かす遊び」に関する調査を実施しました。先日発表された文部科学省の調査*でも、子どもの体力・運動能力の低下傾向のほか、特に中学生女子の運動習慣が薄れていることが明らかになっています。そこで今回は、運動習慣の基礎を作る子どもの「体遊び」の実態や、「体遊び」に対する母親の意識について調査しました。

*平成24年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査より http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/1332448.htm

【 調査結果のポイント 】**■ 子どもの「体遊び」の実態**

- 「体遊び」の頻度や時間は成長を追うごとに減少しており、特に小学校高学年で減少が顕著に
- 遊ぶ場所については、「近くの公園」が最も多い回答だが、「自宅室内」の回答も全世代で多く、「体遊び」の質に懸念あり

■ 母親の「体遊び」に対する意識

- ほぼ100%の母親が子どもの成長に「体遊び」が重要と回答する一方、自身の子どもの「体遊び」の時間に満足している母親は半数に満たない
- 体遊びの時間が「十分でない」と回答した母親に理由を尋ねたところ、幼稚園年中・年長組では「遊ぶ仲間の不足」、小学校低学年では「遊ぶ仲間の不足」に加え「安全面での不安」が多く挙げられた。小学校中学年以上では「遊ぶ仲間の不足」に加え、習い事による「放課後の時間の制約」や「体遊び」自体への「意欲の低下」が大きな要因となっており、成長段階ごとに「体遊び」環境の課題が異なることが浮き彫りに

【 調査概要 】

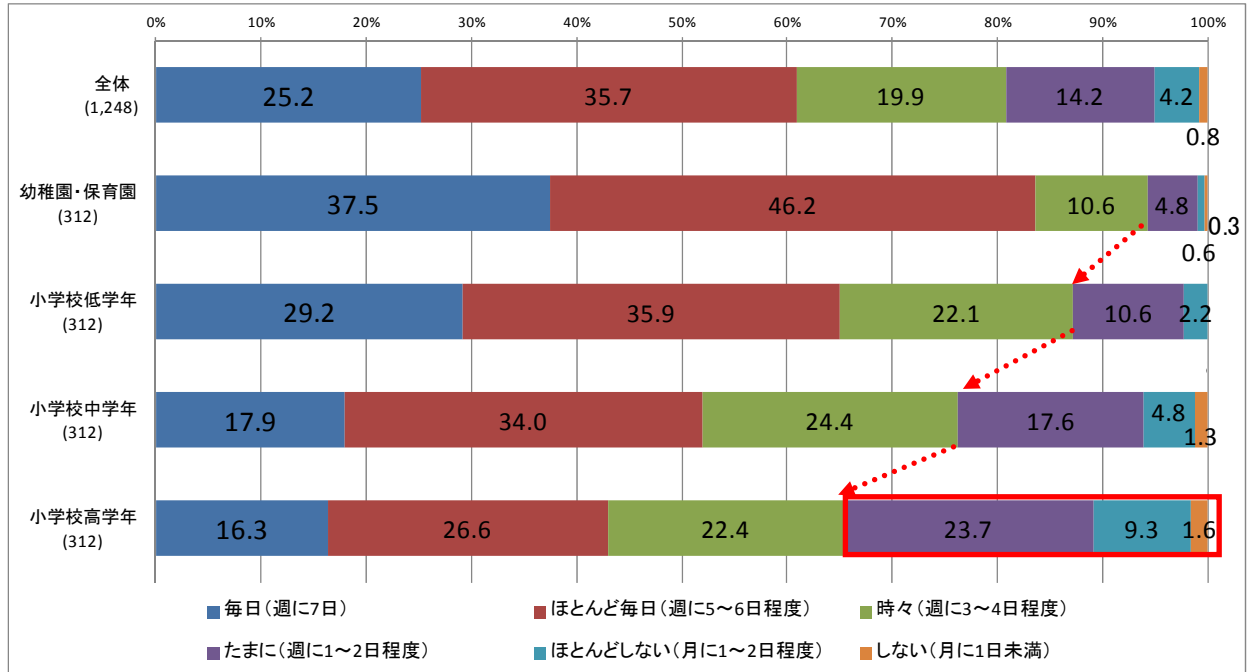
調査方法：インターネット調査
 調査地域：全国
 調査対象：幼稚園・保育園（年中～年長相当）から小学6年生の子どもを長子に持つ20代から40代の母親
 有効回答数：合計1,248サンプル（成長段階ごとに4つの群に分け、各312サンプルの回答を得た）
 ①幼稚園・保育園（年中～年長相当） ②小学校低学年（1～2年）
 ③小学校中学年（3～4年） ④小学校高学年（5～6年）
 調査時期：2013年4月上旬

【 調査結果 】

子どもの「体遊び」の実態

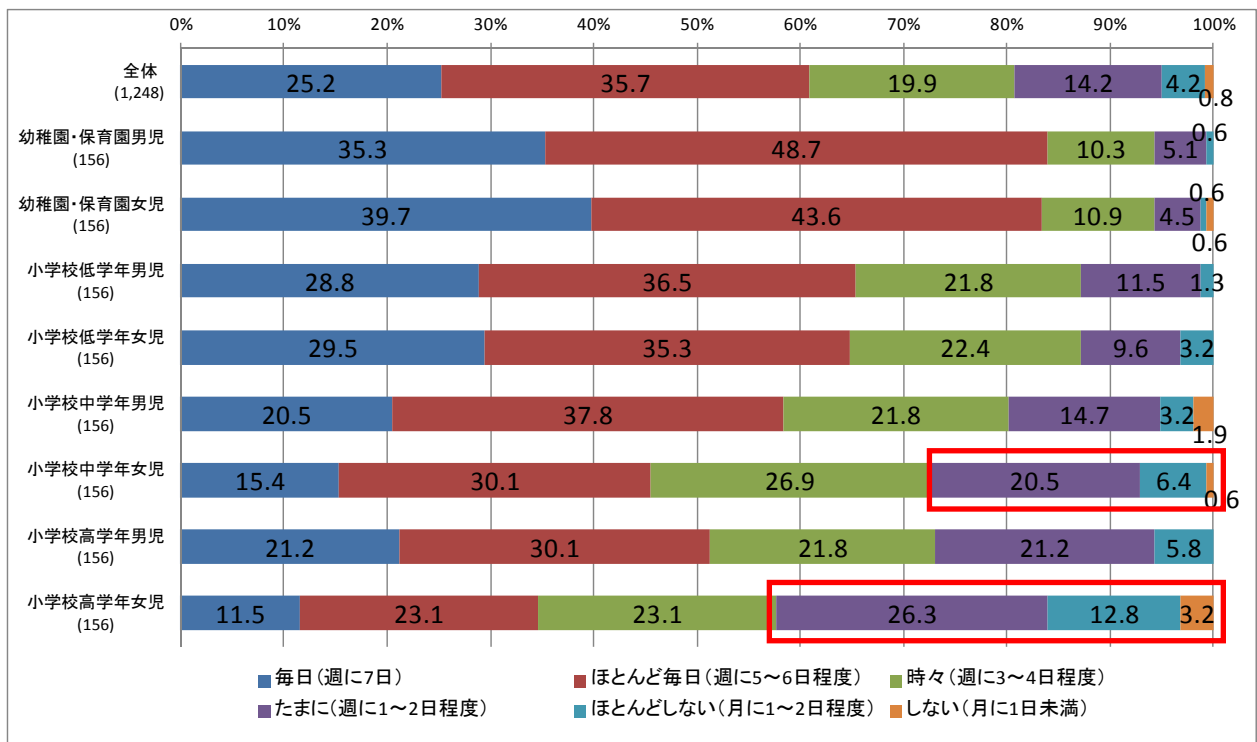
～「体遊び」をしない子ども、小学校高学年で3割以上に～

Q. お子様は、どのくらい体を動かして遊んでいますか。(屋内外問わず)



体遊びの頻度について尋ねたところ、幼稚園・保育園児では80%以上が「毎日」「ほとんど毎日」と回答しました。しかし、体遊びの頻度は成長段階を経るごとに低下し、特に小学校高学年では、3割以上の子どもが「週に1~2日」以下しか体遊びをしていないことがわかりました。

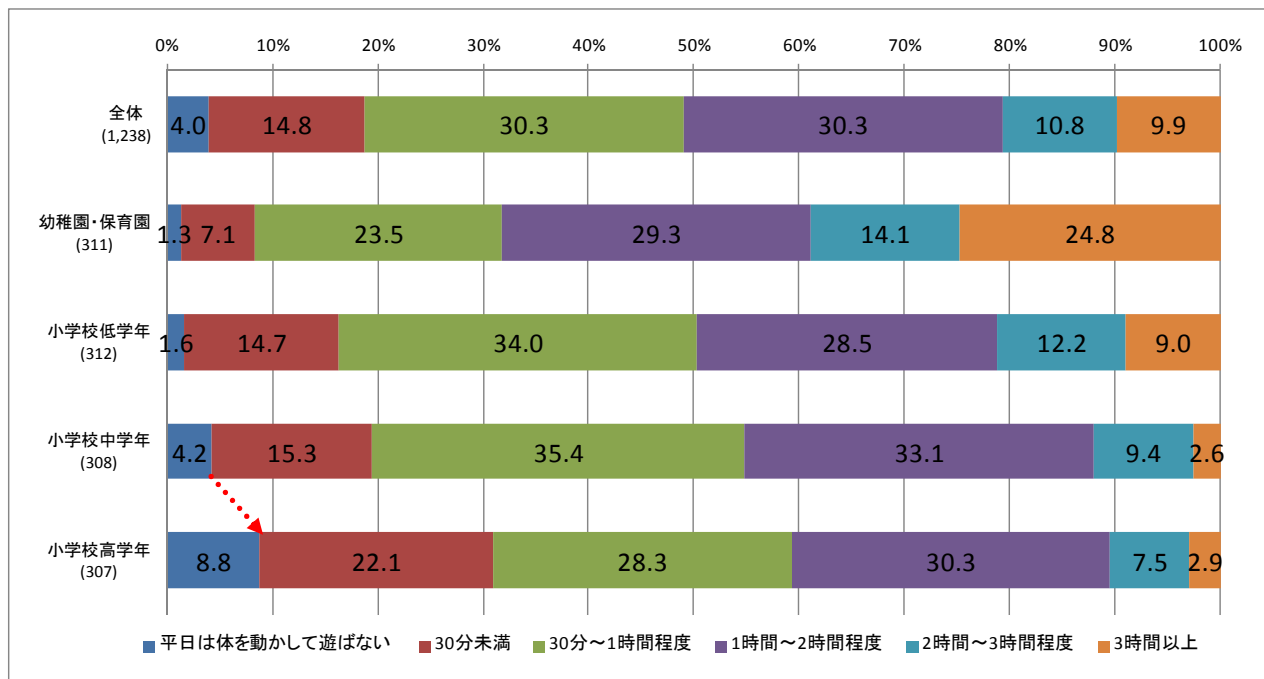
【男女別】



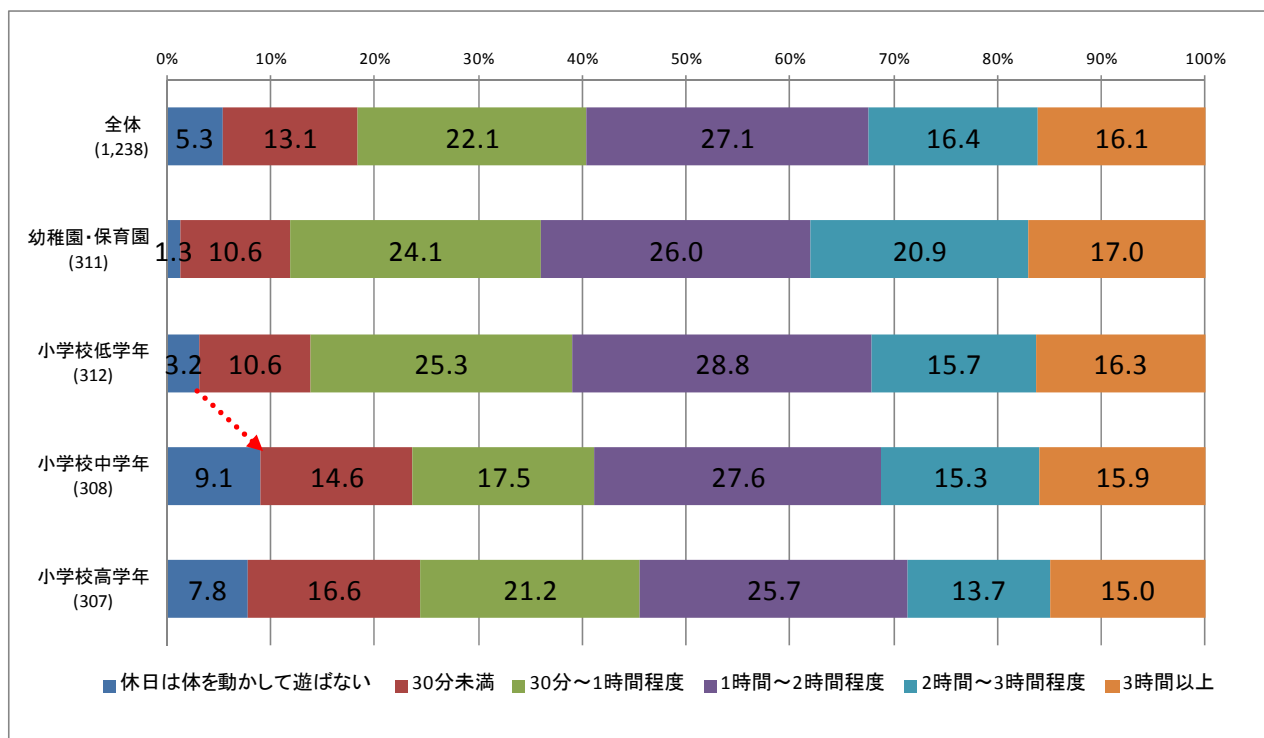
さらに男女別で見ると、小学校低学年までは体遊びをする子ども、しない子どもの差は一定ですが、小学校中学年からは、女兒が体遊びをしない傾向が強まり、特に小学校高学年女兒では4割以上が週に1~2日以下と、顕著な減少が見られました。

Q. お子様は平日・休日に体を動かして遊ぶ際、1日当たりどのくらいの時間遊んでいますか。
(屋内外問わず)

【平日】



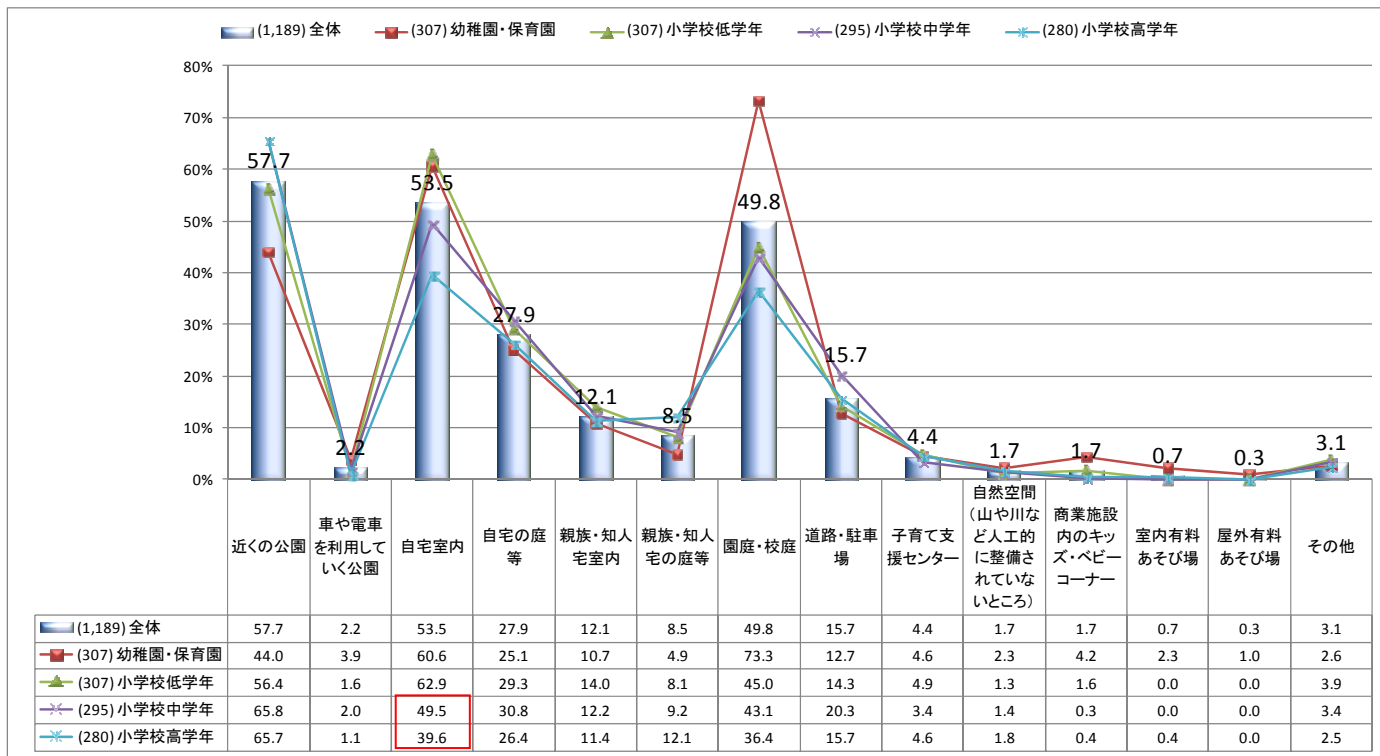
【休日】



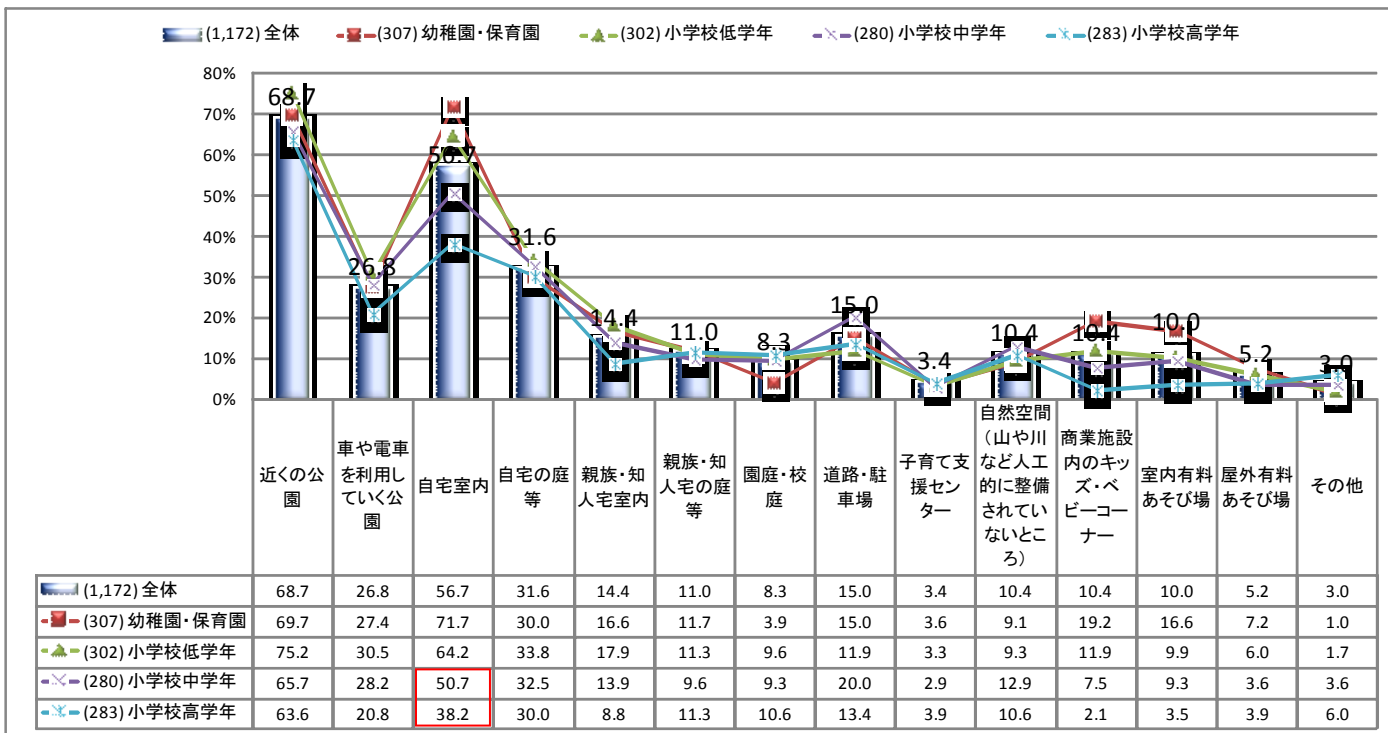
体遊びの時間についても、学年が上がるにつれて減少する傾向が見られ、平日では小学校高学年で、休日では小学校中学年から、1割近くが「体を動かして遊ばない」と回答していました。

～「体遊び」の場所は室内が中心？～

Q. お子様は、平日・休日に体を動かして遊ぶ際、どこで遊んでいますか。(複数回答)
【平日】



【休日】

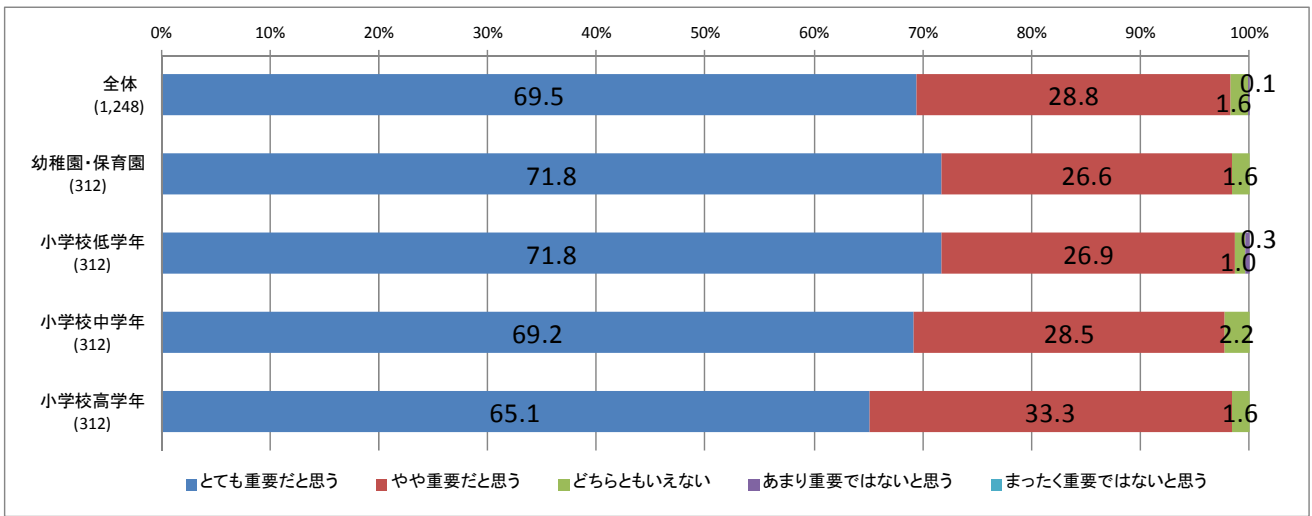


体を動かして遊ぶ場所については、全体では平日・休日ともに「近くの公園」が最も多い回答でした。一方で、「自宅室内」の回答も平日・休日ともに多く、小学校中学年で約半数、高学年でも4割近くの子供が室内で体遊びをしていることがわかりました。自宅の広さや形態にも左右されますが、一般的に室内での体遊びは体の動きが限定されてしまうため、屋外よりも室内遊びが中心の場合は、十分に体を動かすことができているのかどうか、心配が残ります。

子どもの「体遊び」に対する母親の意識

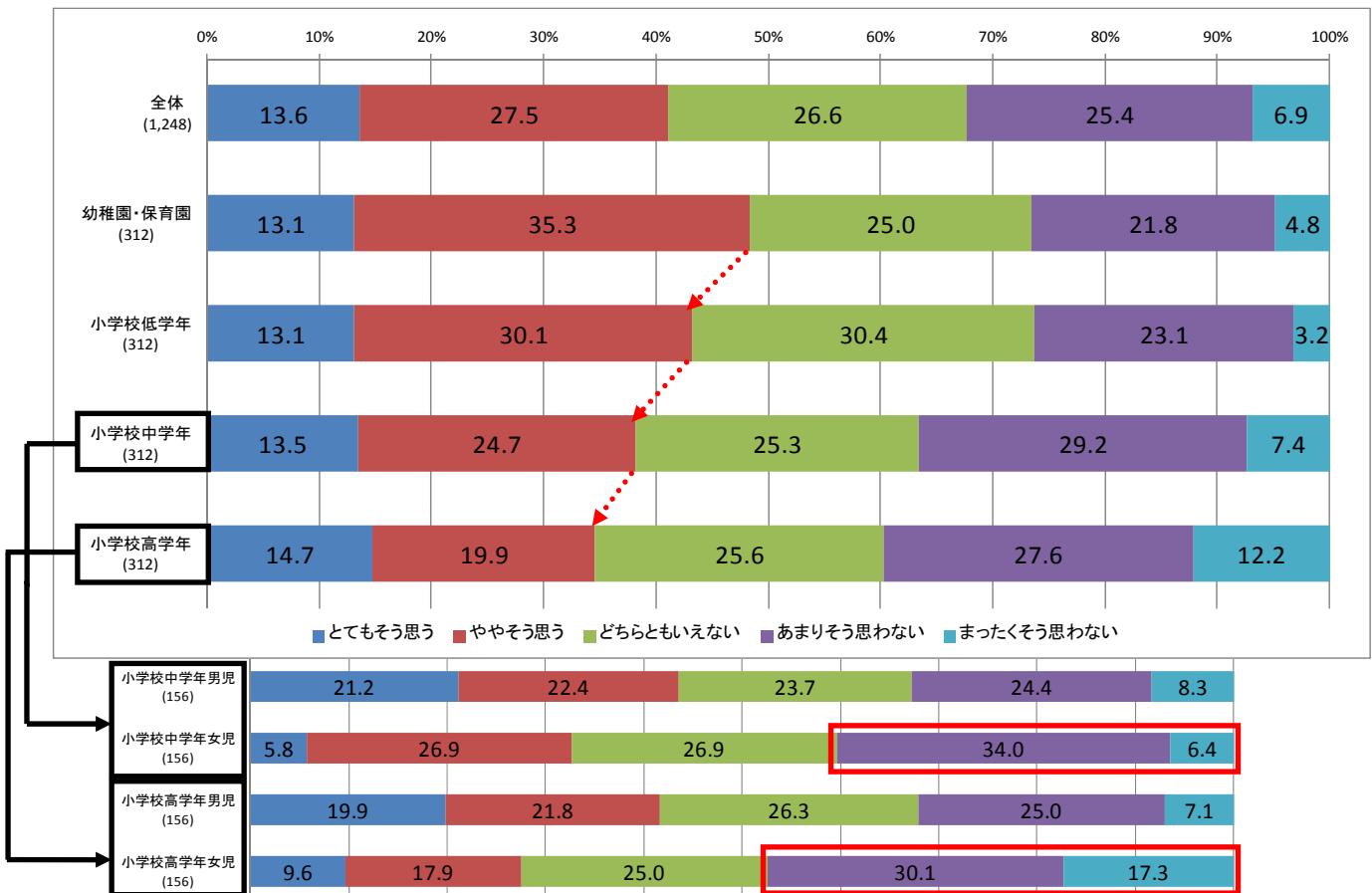
～ほぼ100%の母親が「体遊び」は「重要」と回答するも、「遊ぶ時間は十分」は半数に達せず～

Q. お子様の成長にとって、体を動かして遊ぶ時間（屋内外問わず）は重要だと思いますか。



どの世代でもほぼ100%の母親が体遊びを「とても／やや重要だと思う」と回答しており、体遊びの重要性への認識は非常に高いことがわかりました。

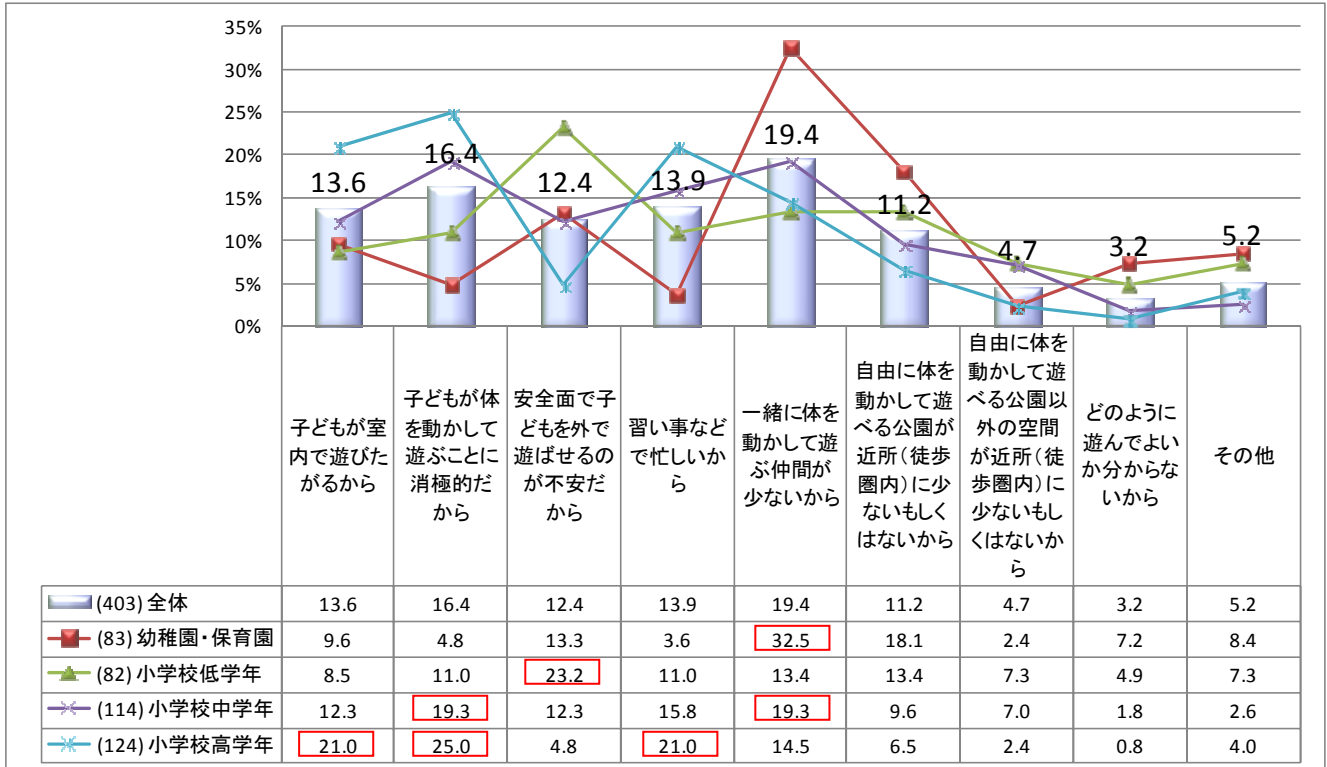
Q. お子様を動かして遊ぶ時間（屋内外問わず）は十分だと思いますか。



一方で、子どもの体遊びの時間に満足している母親（「とても／ややそう思う」と回答）は、全体で4割ほどにとどまり、幼稚園・保育園児の母親でも、半数に満たない（48.4%）ことがわかりました。また、体遊びの頻度が減る傾向にある高学年の子どもを持つ母親ほど、体遊びの時間が十分と思わない割合が増えていく傾向にありました。男女別では、小学校中学年以上の女兒を持つ母親が、特に体遊びの時間が十分でないと考えており、小学校中学年女児では40.4%が、さらに小学校高学年女児では半数に迫る47.4%が体遊びの時間が「十分でない」と回答。体遊びの成長への重要性を高く評価する反面、実際には子どもの体遊びの時間を満足に確保できていない状況が浮かび上がりました。

～成長段階ごとに異なる「体遊び」への課題が明らかに～

Q. (前問で子どもが体を動かして遊ぶ時間を十分と「あまり／まったく思わない」と回答した母親へ)
 お子様を動かして遊ぶ時間（屋内外問わず）が不足している最も大きな理由は何ですか。



子どもの体遊びの時間が不足していると感じる母親に、その最も大きな理由を尋ねたところ、成長段階ごとに異なる原因が存在することがわかりました。

■ 幼稚園・保育園：

「一緒に体を動かして遊ぶ仲間が少ないから」が3割以上の母親から挙がりました。未就学児において、同年代の子ども同士つながりが希薄化している傾向にあることがうかがえます。

■ 小学校低学年：

「遊ぶ仲間が少ないから」は大きく減少し、代わって「安全面で子どもを外で遊ばせるのが不安だから」が2割以上の母親から挙がりました。未就学の頃は母親を中心に保護者が付き添って遊ぶことが中心だったのが、小学校入学以降は子どもたちだけで遊びに出かけるが増えるため、子どもたちだけで外で遊ぶことに安全面の不安を抱える母親が多くいると考えられます。

■ 小学校中学年：

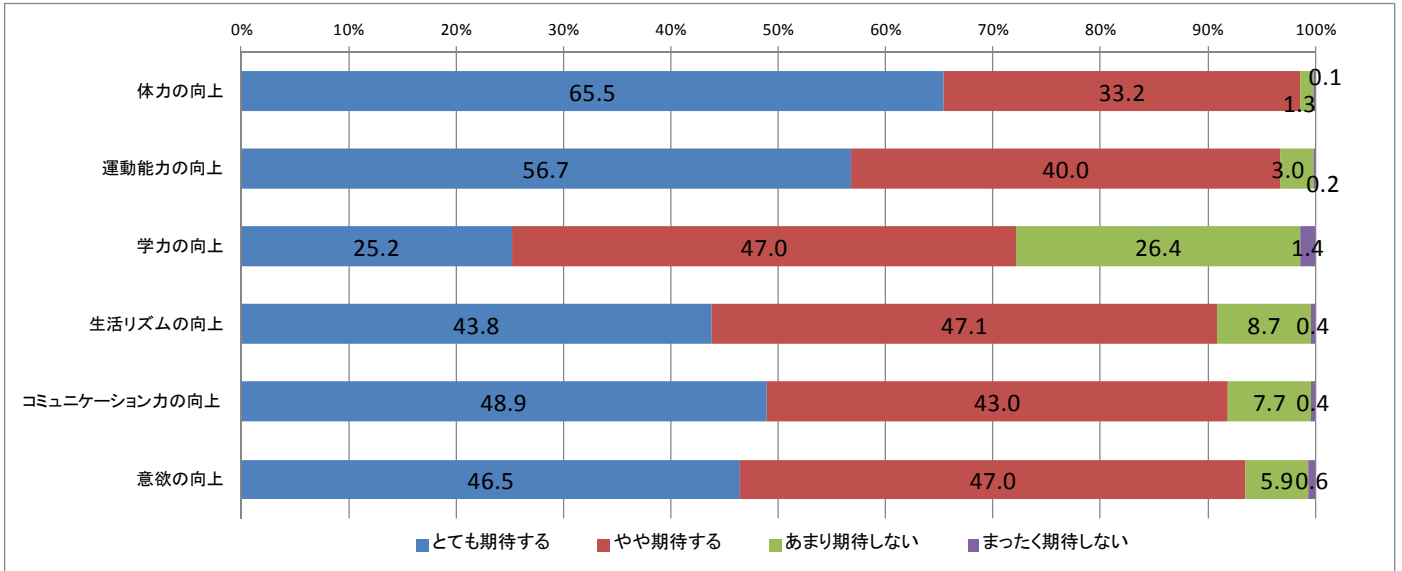
小学校中学年では「遊ぶ仲間が少ないから」が再び増加するとともに、「子どもが体遊びに消極的だから」の回答が増加しました。

■ 小学校高学年：

「習い事などで忙しい」を挙げる母親が約2割いる一方、体遊びに消極的な傾向はさらに強くなっています。成長とともに体遊びの時間が減少する理由には、塾や習い事により放課後を忙しく過ごす物理的な要因とともに、子ども自身の体を動かすことへの意欲が、小学校中学年頃から低下することが大きな要因となっている可能性が示唆されました。

～子どもの体遊びに期待するのは「体力・運動能力の向上」～

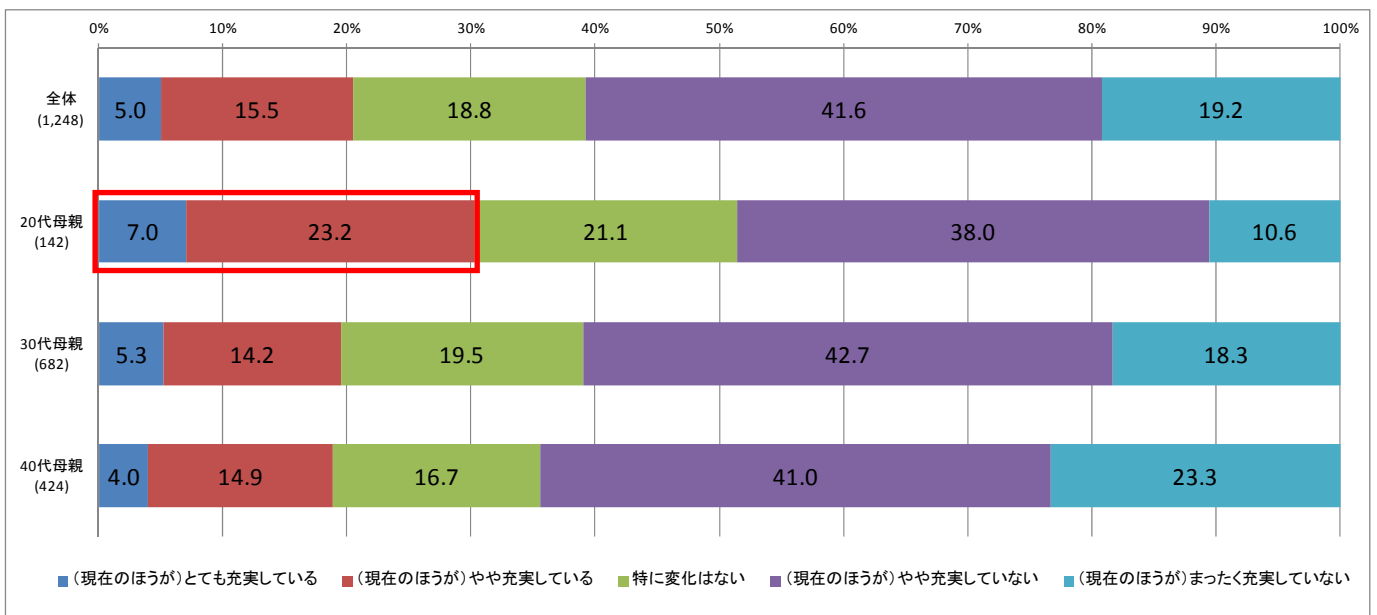
Q. お子様を体を動かして遊ぶことによる効果として、以下の項目についてそれぞれどのくらい期待されますか。



子どもの体遊びによって期待する効果について質問したところ、やはり「体力・運動能力の向上」が多く挙がりました。一方で、「学力の向上」についても、7割近くの母親が「期待する」と回答しており、「意欲」や「コミュニケーション力」、「生活リズムの向上」などとともに、体遊びには様々な能力の向上への期待が込められていることがわかりました。また、自由回答欄に記入があった91人の回答のうち、13人と1割以上が「ストレスの発散・解消」と記入していました。現代の子どもが子どもといえどもストレスフルな生活を送っており、体遊びが有効なストレス解消策の一環として機能していることがうかがえます。

～若い母親ほど、自身の子ども時代と比べ、現在の遊び環境に満足している～

Q. 子どもが体を動かして遊ぶことのできる環境について、現在とご自身がお子様と同年齢のころとを比べてどのように思いますか。



母親の年齢層別に、現在と自身が子どもと同年齢の頃の遊び環境について比較したところ、20～40代の全てで、「(現在のほうが)充実していない」の回答が目立ちました。一方、20代の母親では唯一「(現在のほうが)充実していない」の回答が半数に達せず、「(現在のほうが)充実している」の回答が他の世代に比べて多く挙がりました。現在の20代は物心ついたころには、テレビゲーム機など室内で遊ぶアイテムが普及していた世代であ

り、自治体のファミリー支援の強化や室内あそび場の増加など、子ども向けの施策が増えている現在と比較して、現在の環境のほうが充実していると考える母親が一定数いることがうかがえます。

今回の調査からは、子どもの成長に伴い、体遊びの頻度や時間が減少しており、特に女兒の減少傾向が顕著であることがわかりました。また、ほぼ 100%の母親が子どもの体遊びを重要と認識する一方で、子どもの体遊びの時間を満足に与えることができていないと感じる母親が多くいることもわかりました。体遊びの不足要因については、成長段階ごとにそれぞれ違った課題があり、一口に体遊びといっても、細かな年齢ごとの課題に応じた遊び環境を作っていく必要性が浮き彫りになりました。

教育学を専門とし、自治体の子育て支援にも携わる明星大学教育学部教授の星山麻木先生は今回の調査結果と、子どもの体遊び環境に関して次のようにコメントしています。

「子どもに必要な体遊びの環境は年々劣化しているが、意欲そのものが、次第に低下していくことが心配である。子どもの体遊びを保障するためには、『仲間・安全に遊べる場所・見守る人』が必要だが、公園からも校庭からも我々が子どものころ楽しんだ回転系的大型遊具は消え、街角からは異年齢の子ども集団が自由に遊びまわる姿も消え、体遊びに必要な環境は失われつつある。この不自然な状況について大人は真剣に考えるべきだ。

事故が起これば、遊具は撤去する。安全確保されなければ、家で遊ぶ。大人の都合であれこれ管理した結果、自然の中で遊ぶことや大型遊具の安全管理など手間のかかるものは遠ざけられ、大人が管理しやすい子ども環境へと移行されてきた。その結果、本来、子どもの脳が育つのに欠かせない体遊びに対する意欲も低下しはじめている。

子どもが安全に体遊びのできる環境は必要不可欠であり、子どもの年齢ごとの発達を考慮し、仲間づくりができる体遊びスペースを守るのは大人の責務である。今こそ、遊び環境を新たに創り出す努力が必要である。街のいたるところに、子どもを中心に異世代が出逢い、子どもを見守り、子どもは、体をいっぱい使った楽しい遊びを心から楽しめるコミュニティスペースの創出が必要である。子どもの笑顔を守れる環境は、我々大人にとっても、多様性が尊重される優しい街で暮らせることを意味する」

ボーネルンドでは、今回の調査結果から、子どもの健やかな成長にはあそびを通して体を動かすことの楽しさや喜びを十分に体感することが重要であると改めて強く認識しました。子どものあそびを保障するために、屋内外を問わずあらゆる場所に安心して遊べる環境を創造し、あそび場を社会のインフラにすることを目指し、他企業や行政との協業も推進していく方針です。

【ボーネルンドについて】

ボーネルンドは、あそびを通して子どもの健全な成長に寄与するため 1981 年に設立し、一貫して“あそびの道具と環境”を提供する事業を展開。一般家庭へ向け、子どもの成長に必要な生活道具としての“あそび道具”を提案、全国 89 ヲ所で店舗を展開しています。同時に幼稚園や保育園、公園などに高品質な大型遊具や教育道具の提供を含めたあそび環境の開発を行っており、現在までに手掛けた実績は国内約 3 万カ所まで拡大しています。また、2004 年からは、子どもが遊ぶ機会を増やすために、親子一緒に様々なあそびを体験できる室内あそび場「キドキド」事業をスタート。現在全国 16 箇所、年間 182 万人の親子が訪れています。

《報道関係の方のお問い合わせ先》	
株式会社ボーネルンド 広報室 担 当：讃井、村上 T E L：03-5785-0860 / 080-5901-3591 E-mail：sanui@bornelund.co.jp	株式会社プラップジャパン 担 当：古澤、五味渕、山口 T E L：03-4580-9104 E-mail：bornelund@ml.prap.co.jp
《一般の方のお問い合わせ先（ご掲載用）》	
株式会社ボーネルンド	TEL：0120-358-518